

派遣先所属 宮城県経済商工観光部企業復興支援室
氏 名 伊東 弘雄 (いとう ひろお)
派遣期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の企業復興支援室（本庁行政庁舎14階）では、私を含む派遣職員を中心に、主に『中小企業等グループ施設等復旧整備補助金（※一般的には「グループ補助金」と称します）』を担当し、沿岸地域の中小企業の被災事業者に対し、その復興のための施設や設備の購入等資金の約75%を補助する業務を行っています。すでに4,000者が利用されており、今年度も2回の新規募集を実施しています。震災から8年8ヶ月が過ぎましたが、最近になって、やっと復旧のための条件（※移転先の区画整理事業の完了したとか）が整った事業者もいらっしやって、まだまだ復興道半ばという現実を実感する場面に出くわすことがあります。

担当業務では出張も多く、主に2名が一組になり、遠いところでは片道2時間半くらいかけて、補助事業者の現場へ出向きます。

一人の担当者は、過去の補助金利用者を300～350者、現在進行中の事業者を30～40者、新規の事業者を10～20者程度担当します。毎月5～10件程度の事務処理を行っている、あっという間に時間が過ぎていきます。

この業務に従事してみて、中小企業の経営者や個人事業主の方々の後継者不足が深刻であることを実感します。最近になって、東日本大震災から苦勞して復興したにもかかわらず、後継者が見つからずに廃業を真剣に考えざるを得ないという高齢の法人代表者や個人事業主に出くわすことが増えてきました。それぞれに事情があるとはいえ、大震災にも負けず、長年にわたり地域に根付いて商売をしてきた店が看板を下ろすのは、当事者にとってどれだけ無念であるか、部外者には計り知れません。

なお、今の職場は、他の都道府県などからの応援職員は、本県から2名、千葉県と愛知県から各2名、東京都と高知県から各1名です。所属職員の半分が派遣職員という職場なので、職員間で常に円滑にコミュニケーションを取りながらやっています。



写真1・2：津波から復興した牡鹿郡女川町駅前



2 被災地の復旧・復興の状況

地震・津波被災地域においては、インフラ復旧は終盤に向かいつつあり、土地のかさ上げ工事や区画整理事業が完了した場所に新たな商店街や住宅が再建されるなど、時の流れを感じさせられる機会が多くなってきました。全く新しい街並みとなった場所では、元の街並みを全く想像できないように変わってしまい、記録写真や過去の映像からしか見ることができない場所も散見されます。周辺道路が全く変わってしまい、わずか数週間不在にしたら、自宅や勤務先へ通じる道路が分からなくなったという話さえ聞かれます。今後は、あらたな街並みに、どれだけの人口が定着していくのか、どう産業が再生していくのか、大震災前に過疎化傾向が続いていた多くの地域の現場現場で、それぞれの立場の人たちが知恵を出し合って、いかに新しくなった地域生活の場を盛り上げていくのかを真剣に議論・試行錯誤することが喫緊の課題になっていると思います。

なお、本年10月の台風19号では、海岸沿いの東日本大震災被災地の中にも、水や土砂等による災害が発生した場所があります。自然の驚異とはいえ、何とも世の無常を感じざるを得ません。大震災の津波で店舗を流された事業主が、沿岸から離れた丘陵地で営業再開したところ、台風19号で近くの小規模河川が増水し、激流に店舗の土台をえぐられてしまい、その新店舗さえ使えなくなってしまった事例も。



写真3：仙台七夕祭り



写真4：秋の宮城名物丼『はらこ飯』

3 被災地へ派遣となって感じたこと

宮城県に派遣となって、仙台市の郊外に住まいを設けましたが、近くに東日本大震災の災害復興住宅（高層アパート風）が数棟あります。そこにお住まいの方々からお話を聞く機会はほとんどありませんが、たまたまペット（犬）友達になった方から、大震災当時から現在までの色々な話を教えていただく貴重な時間があります。私は、ただただ、その方のお話を聞いていることしかできませんが、別れ際に、笑顔でお互いのペットを“なでなで”して、ご自宅へ戻っていかれる後ろ姿を見送るたびに、言葉では表現しきれないであろう、この8年半余りの様々なご苦勞に思いをはせ、生意気ながら、せめてこれからの生活が穏やかでありますように祈念しています。

(令和元年10月作成)